

Title	九十九里沿岸に於ける低地遺蹟の研究：豫報
Sub Title	Archaeological sites on the lower land of Kujukuri coast (preliminary report)
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.4 (1954. 11) ,p.81(579)- 88(586)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 九十九里沿岸に於ける

## 低地遺蹟の研究（豫報）

清 水 潤 三

昭和二十七年春本塾大學院社會學研究科を中心として九十九里

沿岸漁村の綜合調査が企圖された際、これと並行して該地方の考古學的調査を行ふことが、相互に有益であると認められた結果、筆者が文部省科學研究助成補助金を受け、松本信廣教授指揮の下にこれが實施に當ることとなつた。幸ひにも本研究に對しては昭和二十八年度も繼續して補助金を受けることが出來、本學事振興資金の一部補助を得ると共に九十九里調査委員會からも援助を仰ぎ得たので一應所期の調査を終り、現在その結果を整理、檢討中である。併し一方では高谷川遺蹟の如き豫期せざる重要な發見があり、北部地方には調査漏れの部分があるので本年度に於て本塾の學事振興資金を申請し、完璧を期して居る。それ故、本報告の公表には未だ相當の時日を要する見込であるが、一應これまでの成果の概要を報告し、大方の示教を受けたいと思ふ。

九十九里沿岸に於ける低地遺蹟の研究（清水潤三）

### 一、調査の概要

云ふまでもなく九十九里沿岸には雄大な弧を畫いた海岸線と、北は飯岡から南は大東岬まで海岸と分れて並行しつゝ一層強い彎曲を示す丘陵地帶一下總臺地の東縁との間に低平な海岸平野が發達してゐる。この平地は丘陵の直下に於ても標高八十九米にすぎず、海岸に向けて緩かに傾斜しているが、些細に検すると海岸線にほど並行する帶狀のやゝ高い部分と、低濕な部分とが交互に布置されてゐることが解る。この點は海岸平野の生成に重要な關係があるが、一方このやうな平地に考古學的遺物が屢次發見され、特に繩文文化の遺蹟が點在する事實は他に類例が乏しいので調査の主眼をこゝに置いたのである。

右の低地遺蹟のうちには早くから知られたものがあり、増穂村上貝塚、福岡村上谷の二貝塚は「東京人類學會誌第三卷」に若林

九十九里沿岸に於ける低地遺蹟の研究（清水潤三）

（五八〇） 八二

勝邦氏が報告し、一ノ宮貝塚、南飯塚遺蹟と共に「日本石器時代遺物發見地名表第五版」に載せられてゐる外、既に報告されたものもあるが、管見に入つた遺蹟は左の二〇ヶ所に及んでゐる。

- 1 ○長生郡一ノ宮町貝殻坂（貝塚）（繩文後期<sup>(1)</sup>）
- 2 △長生郡本納町橘神社境内（繩文中期）
- 3 △山武郡白里町四天木沼（土師）
- 4 △山武郡増穂村南飯塚貝殼臺（貝塚？）（繩文、土師<sup>(2)</sup>）
- 5 ○山武郡増穂村上貝塚（貝塚？）（繩文中、後期）
- 6 ○山武郡福岡村上谷中ノ臺（貝塚？）（繩文後期）
- 7 △山武郡正氣村廣瀬三ツ塚（貝塚）（繩文後期<sup>(3)</sup>）
- 8 ○山武郡東金町掘上油免（貝塚）（土師）
- 9 △山武郡正氣村家徳（獨木舟）<sup>(4)</sup>
- 10 △山武郡横芝驛東方（獨木舟、土師）
- 11 △匝瑳郡東陽村宮内（獨木舟）
- 12 ×匝瑳郡白瀬村木戸（土師）
- 13 △匝瑳郡榮村栢田關端（土師）
- 14 △匝瑳郡八日市場町舊新田殘シ沼（獨木舟、權）<sup>(5)</sup>
- 15 △匝瑳郡八日市場町大境一八（獨木舟）<sup>(6)</sup>
- 16 △匝瑳郡八日市場町大境二六（獨木舟、權）<sup>(7)</sup>
- 17 △匝瑳郡八日市場町舊新田（安行式土器、權）<sup>(8)</sup>
- 18 △匝瑳郡豊畠村大塚原（疑あり）（土師）

- 19 ×海上郡矢指村（舊足洗村）（疑あり）（有角石器）<sup>(9)</sup>
- 20 ○香取郡古城村萬力（獨木舟二隻、附近に繩文土器あり）<sup>(10)</sup>
- 21 ○山武郡大總村高谷川（繩文後期、獨木舟）

（○印は發掘調査を行つたもの、△印は實査、×印は實査未了<sup>(11)</sup>）

右の○印を附したものゝ中で古城村萬力（20）は昭和二十五年本塾考古學研究室に於て實施した調査であるが、その他は本研究に當り、新たに發掘調査したものである。また實地踏査したものの中にもやはり以前に考古學研究室で行つた調査に基くものも含まれてゐるが、それ等を綜合した結果、栗山川以北に調査の不分な點があるとは云へ、先づ大要を知ることが出來、以下略説する如き重要な成果を收めることを得たのである。

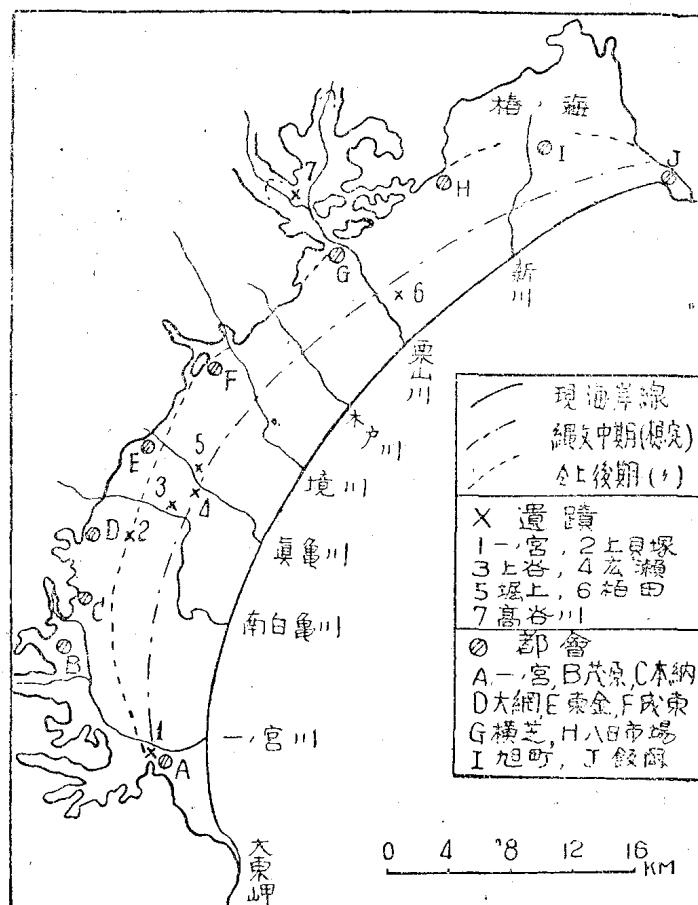
## 二、海岸平野の形成過程と遺蹟の編年

九十九里海岸平野が沖積世に入つて次第に形成され、遂に今日の海岸線に達するまで發達したことは疑ふ餘地がない。此の平野の特徴は數條の帶狀の「丘」と低地が交互に並列してゐる點であるが、そのやうな地形が形成された理由に關しては古くから地理學者による研究が加へられて居り、現在も海岸近くの海中に見られるやうな砂堆が隆起運動によつて漸次陸化していく結果と考へられてゐる。併し細部に關しては異説があり、内田寛一氏は八ヶの並列した丘（高い部分、即ち砂堆）を認め、これが長年月の間に順次陸化したものと考へ、（日本學術協會報告第六卷一五〇

(昭和六年) 小笠原義勝氏は海岸に接して生じた砂堆が少くとも二回の隆起によつて陸化したと考へた。(オアシス十四號、昭和二十五年、資源研報二六、昭和二十七年)併し最近に至つて松井健氏は砂堆断面に見られる生痕及び長さ數米に亘るラミナの存在を指摘し、特に急激な隆起に基くことを主張された。<sup>(12)</sup>即ち海底の凹凸がそのまま陸化し、季節風によつて一様に連續した今日の

井健氏は砂堆断面に見られる生痕及び長さ數米に亘るラミナの存在を指摘し、特に急激な隆起に基くことを主張された。<sup>(12)</sup>即ち海底の凹凸がそのまま陸化し、季節風によつて一様に連續した今日の

「丘」を形成したのであつて、間歇的な急激な隆起が反覆されたらしく、現在はまた造陸運動が緩慢となり、海岸線より約二〇、一二〇、二二〇米の冲合に三列のバーが生成されつつあると結論されたのである。



延長が見られる外、海岸までの間になほ二三列の砂堆を認め得るのである。この部分は恐らく南部地區のベーの陸化と同時に形成されたが、境川及木戸川の冲積作用及び漂砂の堆積、陸化後に於ける季節風による砂の移動と再堆積、兩川のその後の浸蝕作用などによつて大きな變貌を遂げたものと見られる。更に栗山川以北では現在の海岸線に並行する砂丘は明瞭でなく、却て栗山川の兩岸には北東—東西に延びる砂丘が發達して南部地區とは趣を異にしてゐる。かゝる現在の地形は恰も境川から北へ向ふと西の冬季卓越風に對して下總臺地の遮蔽を受けることなく、直接曝露されてゐた爲に砂堆の風力による移動、再堆積が南部に比して激しく行はれた結果であらう。(この點については多田文男氏の示教を受けた。)

栗山川の谷口には松尾から横芝に延びる大きな砂洲があり、これによつて塞がれた潟湖の存在が考へられ、五米等高線は遠く多古町の南に達してゐる。我々の調査した高谷川遺蹟(21)は實にこの潟湖の岸に當つたと考へられるが、その標高は四・五一四メートル泥炭層中から加曾利B式土器を多數發見して居り、當時の地形を推すことが出来る。

八日市場附近について見ると、最近殆んど干拓されたが「乾草沼」を初めとして沼澤地が發達し、「丘」は再び現海岸線に並行するかに見へるが標高は低く七メートルを出ない。

この附近から繩文文化後期と推定される獨木舟の發見が相次ぎ、明瞭な遺蹟を發見し得ない處から見ると、この附近の陸化は當時あまり進んでいなかつたと推定される。直ちに結論を導き得ないが小笠原氏がこの地區で二層の泥炭層を發見してゐるのである。

八日市場町の北端及び今日の總武本線飯岡驛附近からは「椿ノ海」を内包する砂洲が發達した。飯岡附近の標高が最も高く、旭町附近が最低で、六米前後の「丘」が陸化した時に椿ノ海が海洋と遮斷されたと見てよい。

即ち境川以南、境川—栗山川—八日市場を連ねる中部地區、八日市場以北の三地帶は長大な九十九里平地の弯曲の中心と兩端に當り、季節風や潮流の影響が相違し、その形成過程も異り、陸化の年代にも幾何かの遲速を想定せしめるのである。九十九里海岸線は當初から弧狀を呈しつゝ發達したのではなく、古くは凹凸のある海岸ではなかつたかと疑はれる。併し乍ら次第に平野が發育して行くに従ひ、今日の姿に近づいたらしく、漂砂と風力が漸次凹凸を埋め、弓形の海岸を形成したやうに思はれる。その時期は地圖に現はれた等高線と後述の遺蹟の分布狀態から推して、繩文後期の頃、等高線を以て示せば六一五メートル邊が陸化した時代と考へられやう。(圖参照)

右に述べた處は今日の標高の近似がそのまま往昔も變化なく、標高の相等しい地點がほど同時に陸化したと假定した上で推論

であつて、隆起運動には局部的に大小があり、逆に沈降現象をも伴ふ場合もあり得る上に、陸化後の砂丘の移動を考慮すると大膽にすぎる嫌いがあるが、考古學的調査に基く遺蹟の分布状態は大體に於て右の見解を裏書きするやうに思はれるのである。

然らばこの平地に遺蹟はどのやうに存在してゐるのであらうか。現在までの處では繩文文化中期の遺蹟が最も古く、それ以前のものは發見してゐない。また繩文文化の遺蹟は殆んどが南部地區に集中してゐる。この事實は繩文文化中期以前に於ては海岸平地の發達があまり進んでゐなかつたことを示すものであり、更に南部地區のそれが他に比して早かつたことを推さしめるのである。

中期の遺蹟としては本納町橘神社境内(2)と上貝塚貝塚(5)を擧げることが出来る。前者は本納町背後丘陵の直下に當る標高十米内外の緩斜面にあるが、後者は平野たゞ中の「丘」に存し、標高は八米前後である。而も上貝塚に於ては自然貝層の直上から遺物を出す點から推して陸化後間もない頃形成されたことがほど確實であり、繩文中期の海岸線は今日の標高八米以下には進出しきれないと見ることが可能となるであらう。繩文後期の遺蹟は更に著しく標高の低い地點にも見出されると共に、數も増加してゐる。即ち一ノ宮貝塚(1)上貝塚(前記と同遺蹟。<sup>13</sup>層位關係は不詳)、上貝塚東北及北方の二ヶ所の土器破片發見地は各八米前後で

あるが、上谷(6)、廣瀬(7)は共に五・五乃至六米弱であり、一糠半ほど現海岸線に近よつてゐる。しかも面白いことには、一ノ宮貝塚は後期の中でも中期の要素を含み、時間的にも古いと信ぜられてゐる堀ノ内式土器の遺蹟であり、上貝塚にもこれが相當量認められるのに對して、上谷、廣瀬の二者は比較的新しい土器である加曾利B、安行兩式の土器を主體として居り、汀線の進出と土器編年との間に明確な關聯を認めることが出來たのである。かくて繩文後期の汀線を概ね五米附近に求めることが出來やう。たゞ高谷川(21)遺蹟は栗山川の支流、高谷川の岸に接する水田下約一米に包含層を發見して居り、標高は四・五乃至四米と認められる。この事實を以て往時の汀線を四・五一四米まで下して解釋するか、我はこの遺蹟附近の隆起運動に他の地區とは差違が見られ、早く隆起してゐたと考ふべきか、栗山川谷口の砂洲が急速に且つ顯著に發達してゐた結果に歸すべきか、輕々しく決し難いが上記の推論を根本的に改むべきものとは思はれない。むしろこの遺蹟が溪谷内にあつて、海岸平野と地理的條件を異にすることを重視するならば、隆起運動の量、またはその年代の相違に歸し得るのではないか。次に土師器出土地のうち堀上貝塚(8)は出土廣瀬と略々同じく五・五米内外を示すが、稻田遺蹟(13)は出土土器も現存し、地點も明瞭で疑ふ餘地がないが、その標高は約五米であり、筆者の調査した確實な遺蹟のうちで最も海岸線に近

い。またやゝ不確實ではあるが四天木沼の土師出土地（3）は四米餘と認められ最低の標高を示してゐる。

更に念の爲歴史時代の海岸線に關する記録を檢すると確實な資料に乏しいながら片貝町北ノ下には享保年間既に商人の居住が見られた。この地の標高は約二・五米と考へられ、同時の汀線は二米の邊りと見て大過ないであらう。松井健氏は縄海村に於て三百年間に六五〇米の汀線後退を見たと述べられたが、それを標高になほして見ると略々相似た結果が得られる。それ故上記の各時期の遺物出土地のうち最も標高の低いものがそれぞれ當時の海岸線に最も近い遺蹟と見做せば、縄文文化中期八米、同後期の後半五・五米、土師器の時代五一四・五米、江戸時代中期二・五一二米の數値を得る。即ち各時代の汀線は概ね右の等高線附近に存在したと考へて大差なく、從て同一標高の地點はほど同時に陸化したことを探し得ると思はれる。逆に右の地史的編年は考古學的遺物の編年を導き得るのであつて、その結果は今日信じられてゐる考古學的編年と背馳しないのである。

右の結果を更に詳細に檢すると、縄文文化中期と後期後半の間に二・五米といふ大差が見られ、後者と土師器との間には〇・五一一米の差しか見られず、土師器と江戸中期、江戸中期と今日の間には各々二米前後の變動が見られて考古學上から推定される實年代と比較するとやゝ相容れないものがある。此の事實は松井健氏が説かれたやうに隆起運動が繼續的、等量的な運動ではなく、急激な斷續的なものと考へることによつて解決されるのではあるまいか。たゞ縄文後期と土師器との間に殆んど差違の認められぬ點は一般に信ぜられてゐるやうに兩者の間に大きな年代差を認めるのに困難を感じるのであるが、この附近に彌生文化の顯著な遺蹟を見出せない點から推して、或は兩者の年代に大差がなかつたかとも疑はれる。これが本地方の特殊な事情に基くものか、或は單に急激な隆起の行はれなかつた結果に基くもので異とするに足りないかは今後更に検討を要する問題であらう。ともあれ我々はこゝに、從來漠然と想像されてゐた海岸平野の形成過程に一應の年代的な裏付けを與へることが出來たのであり、同時に考古學上に於ては結果こそ同一であつたとは云へ、編年研究に新たな科學的基準を提示することを得たのである。

### 三、低地遺蹟の性格

海岸平野が一應形成された後に於ても、帶狀の低地は潟湖乃至は向背濕地の狀態を保つてゐたことは「椿ノ海」や八日市場附近一ノ宮北方などに最近まで殘存した池沼の分布狀態から推定に難くない。この地方から古代獨木舟が最も數多く發見されてゐるのも當然のことゝ云へやう。また各時代を通じて居住者の主たる生業が漁業にあつたらしいことも地理的環境から推して十分理解し得る所である。縄文文化の一ノ宮貝塚からは釣鉤、銛など漁具と

覺しき骨角器が豊富に發見される許りでなく、夥しい魚骨の外にウミガメの遺骸やクジラの骨が見出されて外洋に活動した狀態を窺ひ得るし、時代の降つた土師器を出土する掘上貝塚に於ても貝を採收し、魚を漁した生活が續けられたことを確認し得、却て農耕の盛行を窺ふべき資料を見出すことが出來なかつた。

また一ノ宮貝塚は我々の發掘調査した丘陵直下の低地以外に丘陵中段にも貝層が存する反面、低地の部分からも埋葬人骨が發見され、遺物の出土状態も一般の貝塚と異なる所がなく、ほど定着的な聚落址と認められたが、海岸平野の中央に位置する上貝塚、上谷、南飯塚、廣瀬等の諸遺蹟がいかなる性質を有するものかに我々の注意が注がれたのである。即ちこれらの遺蹟は各々當時の海岸線に接し、陸化後間もない時期に當り、直接風浪に襲はれる危険に曝されてゐたに相違ないからである。我々は南飯塚に於ては適確な包含層を見出し得ず、廣瀬の遺蹟は河川改修工事によつて切り崩され、その痕跡を止むるにすぎない爲に上貝塚、上谷の二遺蹟を發掘調査したに止るが、その結果は兩者共に極めて類似した様相を示し定住的な生活の行はれたことを疑はしむるに至つたのである。即ち表土下一米弱に、ある時期における海岸線の存在を示すと認められる自然貝層が存し、その直上に貝殻を混じへた土器の包含層が乗つてゐる事實は海中に生じた砂堆が陸化して砂洲狀を呈した直後に繩文化人の足跡を見たことを示すものと思は

れ、加ふるに遺物も散在する少量の土器片に限られてゐる。かやうに地理的には不安定な場所で遺物も僅少である事實は定住的な生活の行はれたことを否定するに十分であり、恐らくは漁撈に從事する目的で季節的に往來する場所であつたかと想定される。かやうな習俗は未開人の間に往々見られる所であるから、無稽な想像とは云へぬであらう。背後の下總臺地縁邊には繩文式土器を出す豊富な遺蹟が點在して居るから、彼等の主要な聚落はやはり他の地方と同様に臺地及びその周邊渓谷に臨む地帶に止つてゐたものと考へられる。我々は比較研究の目的でそれら遺蹟の多くを踏査し、山武郡大總村角田所在の新たに發見された繩文化後期の貝塚を發掘調査してゐる。

土師器出土地に關しては精査し得たものが少ないので多くを語り得ないが、遺物の豊富な遺蹟は見られない。前記掘上貝塚も遺物に乏しい上に漁者の性格を示して居り、どこまで農耕、特に水田耕作に伴う定住的な生活が行はれたかを疑はしむるものがある。砂堆の陸化に伴ひ、その背後に後背濕地が形成されたことは疑ひないが、これを水田化して十分に利用した形跡は認められない。今日の農業聚落が多くは江戸時代に於て形成されたらしい點から推すと、後背濕地の開拓は困難であつたと覺しく、土師器の時代も下總臺地周邊に主要な生活圏が限定されてゐたと考へられる。臺上に多數の規模の大きい遺蹟が見られ、古墳も數多く營まれて

九十九里沿岸に於ける低地遺蹟の研究（清水潤三）

（五八六） 八八

ある點からも右の推定を裏付け得るであらう。海岸平地に在つて

は土師の時代も繩文文化人と同様、特殊な目的をもつて往來する程度か、さもなくば分業發生に基く少數の漁業專業者が遺蹟を残したものであります。彌生文化の遺蹟を一ヶ所も見出しえてゐない事實もこれと無關係ではあるまいと思はれる。

高谷川遺蹟は溪谷内にあつて海岸平野とは立地を異にするが、

既述の通り標高の低い點から海岸平野の成生と密接な關係にある。背後に接した丘陵上にも土器片の散布を見、獨木舟を伴出してゐるので、或は潟湖のほとりに出漁した遺蹟かとも疑はれる

が、夥しい土器の包含狀態、漆塗竹製櫛の出土等は上貝塚や上谷

などの所見とは全く異つてゐる。しかも多數の杭が並列して發見

されて居り、その徑が細小で十粂に満たぬ點と、平面の確然としない點に問題が殘るが、我國では未發見の水上住居址の疑ひがある。今秋再度の調査を行ふ豫定で結論は保留するが、低地遺蹟の一性格として注目を要するものと思はれる。

以上今次の調査に基く成果の概要を略述したのであるが、漁業關係の遺物、資料が案外乏しかつた點を除いては所期の目的を十分上廻る成果を擧げ得たものと信ずる。松本信廣教授、米山桂三教授、九十九里調査委員會を初め、御援助を賜つた諸氏に對しこの機會に心からなる謝意を表したい。（一九五四・五・三）

【註】

- 1、史前學雜誌九一五、大山柏外二氏の報告がある。
- 2、人類學雜誌十九、二一七頁、吉田文俊氏報告參照。
- 3、上代文化二〇、川戸彰氏の研究がある。
- 4、「加茂遺蹟」八五頁、松本信廣教授の略報がある。
- 5、同右 七五頁
- 6、同右 九一頁
- 7、同右 九一頁
- 8、同右 九一—九二頁
- 9、人類學雜誌二七一五、柴田常惠氏報文參照。
- 10、「加茂遺蹟」九二頁
- 11、筆者獨自の見解に基き安行式土器を一括後期としてある。
- 12、資源科學研究所彙報二六、四九頁
- 13、上貝塚遺蹟の東北方約五〇〇米及び北方五〇〇米の附近で共に安行式土器の小片各一ヶを發見してゐる。或は類似の小遺蹟が存するのかもしれぬ。

（本稿は昭和二十七、二十八兩年度文部省科學研究助成補助金による研究結果の概要であり、一部九十九里調査委員會並に本塾學事振興資金の補助を受けたことを明記する）  
訂正、挿圖凡例の海岸線記號は繩文中期と後期とが入れ代わる。